

文化活動 成長の原動力に

北陸に居を移した3月は、穏やかな春の陽気に恵まれ、新型コロナウイルス感染症の公衆衛生上の措置が解除されたことで、市街地は久しぶりの外出を楽しむ人々ににぎわうなど、自宅がある東京・渋谷の喧騒^{けんそう}とは趣を異にした、活気あふれる中にも文化的で落ち着いた街の姿が印象的であった。歴史ある伏見川の桜並木、「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭」、国宝・高岡山瑞龍寺、能登国分寺跡など、各地とも脈々と受け継がれる歴史、伝統、文化を感じさせる名所ぞろいであった。

この間、地域経済は社会活動の正常化につれて、百貨店売上高をはじめ個人消費に持ち直しの動きがみられるなど、経済の体温が徐々に上がってきた。現在の国際情勢、供給制約のもと、原材料、エネルギー価格の上昇などの影響はあるが、改善の大きな流れは保たれている。

一方、長期的には、少子高齢化、人口減少が地域経済の深刻な課題だ。当地の働き手の中心となる生産年齢人口（15～64歳）は、1990年代にピークアウトし、減少傾向に転じている。これまでは逆風に吹かれながらも、産業面では、国際競争力がある製造業が高付加価値製品を産み出し、成長を実現してきた（石川、富山県の県内総生産 1990年度 8.3兆円→2018年度 9.5兆円）。家計では、1世帯の人員が多く、持ち家で家族が支え合って収入を確保し、消費面でも、積極的な支出を通じて、地域にお金を回して貢献するなど、企業、家計の双方が地域を盛り立て、支え合う姿が、北陸の強さの一面と感じる。

今後、人口減少に対処し、「豊かな北陸」を発展させていくため、企業の稼ぐ力（労働生産性）の向上、人的資本への投資とともに、経済と無縁にみえる①健康寿命の延伸②伝統、文化の振興——も重要と指摘しておきたい。

労働力の観点からみると、2010年代は、女性と高齢者の就業率を高め、効果を上げてきた。しかしながら、人数が最も多い第1次ベビーブーム人口を含む、70～74歳の県民（2021年は石川県9万4132人、富山県9万1566人）が、これから75歳を迎える。高齢化が進む他県では、家族の介護、看病を理由に働けない勤労世代が多いところもあり、就労時だけでなく、引退後も健康維持は重要だ。石川、富山県の健康寿命は、他県比で優位にある（2019年は石川県＜男性73.08歳、女性75.90歳＞、富山県＜男性72.71歳、女性76.18歳＞）が、それでも75歳前後となっている。

また、伝統、文化の振興は、イノベーションの動きを停滞させないためにも重要となる。当地は文化活動に参加する動き（行動者率）が活発であるが、ワーク・ライフ・バランスのもとで、多様な価値観、幅広い世代や他地域の人々との交流がさらに広がれば、新たな価値創造の土壌となる。

思い起こせば、春の日に見た文化的で落ち着いた街のにぎわいは、先人から受け継がれた北陸経済の成長、発展の隠れた原動力であったのかもしれない。